

第5回 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定委員会 議事録

- ・日 時 令和3年9月28日(火曜日)午後6時30分～8時30分
- ・場 所 武蔵野市役所 812会議室
- ・出席者 朝岡委員長、見城委員、千種委員、町田委員、森副委員長、渡邊委員、北川委員、小島委員
(名簿順、敬称略)(見城委員、渡邊委員、北川委員はオンライン参加)
- ・欠席者 市川委員
- ・傍聴者 1名

1 開会

【委員長】ただ今より、第5回第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定委員会を開催します。

【事務局】配布資料の確認

- ・資料1 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画《骨子案》
- ・資料2 第二期武蔵野市市民活動促進基本計画策定に係る論点(たたき台)
- ・参考資料 計画骨子に係る検討項目の整理表

【委員長】今日の委員会は、基本計画そのものについて議論しなければいけません。ただし、いきなり文章を出されて文言修正をすることは効率も悪く、委員の皆様の意見も反映しにくいということもありますので、まずは骨子案という形で基本計画の概要に当たるものを提示していただきます。はじめに事務局にご説明いただいて何かご質問等があればお伺いいたします。あくまでも骨子案ということですので、骨子案に肉付けをして実際の計画案のたたき台を作るためには、いくつかの論点について委員の皆様の意見を聞いて合意できるものは合意し、事務局が文案を作ることになります。今日は全体のイメージを骨子案としてお示しいただいて、ここにどう肉付けするのかという議論をしていただきます。そのためには資料2にあるように、かなり踏み込んだ意見交換が必要なものを論点のたたき台という形で整理していただいていますので、主にこの論点ごとに委員の皆様に議論をしていただいて、その意見を踏まえて次回、骨子案よりもう少し肉付けしたものだと思いますが、具体的に計画について議論していただくという段取りです。今日は一手間掛ける部分をやっていただくということですので、主に論点のたたき台のところで委員の皆様の意見をお伺いできればと思っています。それでは資料1の骨子案について説明をお願いします。

2 議事

(1) 第二期計画の骨子案について

【事務局】(資料1について説明)

【委員長】事務局から1章・2章について意見があればということですが、実際に1章・2章の意見を聞いていると本来の議論ができなくなってしまう危険性がありますので、ひとまず委員の皆様に見ていただいて、次回以降に文章のチェックと文言修正の段階になりますので、今日は議論しませんが読んでおいてください。3章の部分はすでに昨年度までの委員会で内容が概ね示されています。本委員会で書かなければいけないのは、1、2、4、5章になります。今日は4章の部分について文章化するために基本的な論点について議論していただきたいということです。論点ごとに区切って説明をしていただいて、委員の皆様の意見をお伺いしたいと思います。それを次回までに反映してたたき台をつくるという考え方です。資料2のたたき台に沿って論点ごとに説明と議論をお願いします。それでは論点①について説明をお願いします。

(2) 計画策定に係る論点について

【事務局】(資料2 論点①について説明)

【委員長】エビデンスが分かりやすい作り方になっています。ここで議論しなければいけないの

は、論点①全体として喫緊の課題としてオンラインツールの基盤整備と市民活動支援のためには、活用促進をしなければいけないというテーマがあります。具体的に何を取り組まなければいけないのかが7点あります。○や◎がありますが大事なことはそれぞれキーワードがあり、1点目は情報格差の問題。2点目は環境の整備で、オンラインが使えない公共施設が多い。3点目はコミセンなどの運営側の対応。4点目は技術指導を何らかの形で市民活動促進に組み込む必要がある。5点目はリスクについての共有とリスクマネジメントの必要性。6点目はオンラインの活用の仕方そのものの支援とは別に、少しアプローチは違いますがオンラインでの活動支援を考えられるのではないかと。7点目は市民活動の共有や発信方法として具体的に何が使われているかということで、ホームページが49.5%、SNSが1～2割というのが現状である。この7つのキーワードについて皆様の意見をお聞かせいただきたい。「議論を要するポイント3と4」と書かれたのは、7つのものが並列であるものではなく、交通整理をするために、ここを意識して議論してくださいということです。1～7の点についてどうしたらいいかということをお聞かせいただければと思います。

【事務局】コミセンのWi-Fi整備について補足の説明です。9月市議会において予算が認められましたので、今年度中に各コミセンにWi-Fiの環境整備ができる予定です。

【D委員】16コミセンにWi-Fiの設置が決まりました。利用についてはそれぞれのコミセンで段階的にやっていくということですが、コミセンの運営側がWi-Fiやデジタル化に対しての理解をしていないという課題があります。運営側としては、ここでテレワークをされたら、コミセンは仕事の間ではないなどの意見も想定され、コミセン側の考え方の問題になってきます。Wi-Fiが整備されることは画期的なことなので、これから運営側がどう取り組んでいくのか考えていかなければいけません。まずは利用者から使い方を習う。Wi-Fiがあるコミセンを使って何ができるのかは、こちらが考えるよりも利用者からこんなことができるのではないかと声が出てくるはずです。それに対してコミセンがどう応えていくのか。商売につながってしまうからダメだという話は絶対に出てきます。Wi-Fiに関してはそれほど心配していませんが、デジタル化については圧倒的にスキルが足りていないので問題だと思います。

【委員長】まずは、いろいろな視点から意見をいただきたいと思います。

【A委員】市役所のツールを紹介したいと思います。7番の「団体による活動情報の発信方法」はホームページが多いということで、市役所も市報の次はホームページという点で同様ですが、今は、Twitter、Facebook、YouTubeを使っています。もう少しすると他の動画アプリを使用したサイトも出てくるのではないかと考えています。そういったものは情報提供するだけではなく、市民の皆様も含めて情報を発信していただけるので、非常に有効な手段だと思っています。ただ、それを使いこなすのが難しく、市役所の職員もそうした課題があると思っています。

【F委員】オンラインツールの基盤整備というものは、いくつかの層を分けて考える必要があると思います。コミセンのWi-Fiはインフラレベルの話です。蛇口をひねれば水が出るようになるという話で、水道をひくと勝手に水を飲む人がいるからどうしようという話に聞こえました。ネットにつながるということは何をやる上でも前提なので、Wi-Fiがなくても携帯でつながっているわけですから、インフラの問題で望むべきは、コミセンだけではなくすべての公共施設にWi-Fi環境が整っているという状態が大前提だと思います。この委員会の話ではないのかもしれませんが、武蔵野市ともあろう自治体が公共施設にWi-Fiがないことが本当に恥ずかしいことだと思うので、基盤整備として真っ先にやるべきことだと思います。その上でインフラの上にどういう情報をサービスとして乗せていくかという話が次のレベルだと思います。さらにその上にそういった情報ツールを使ってどういうコミュニケーションを生み出していくのか、どういう内容をどういう形で伝えていくのかという話だと思います。「Wi-Fiレベルのインフラの話」「その上で提供される情報サービスの話」「その情報サービスを使って発信していく内容に関するコンテンツ運用の話」、少なくともこの3つのレベルで分けて議論しなければいけないと思います。

【委員長】大事なご指摘だと思います。

【B委員】今の意見に通ずる部分がありますが、大きな環境を整える部分と人材の問題やツールの活用の問題は切り分けて考える必要があると思います。まずは環境を整えるということが大事だと思います。その先に続くツールの活用や人材の部分は、年配の方はわからないが若い人は活用ができていたなどの話がありました。利用者から学ぶというのもあると思いますが、そういう形を作るためには、どちらにとってもメリットがある環境ができなくてはならないと思っています。それができるかはわかりませんが、前回議論したプレイスの活用のことを個人的に考えてみました。D委員からあった商業利用につながるのはいかがでしょうかということを議論していく必要はあると思いますが、わざわざなぜそこに行く意味、メリットがあるのかという部分で、シェアオフィスのような形や、市民活動をスタートするための登記などができるといいと思います。たまに市役所で専門家が無料の相談会をしていますが、行政書士や書類作成に関わる専門家がそこでやってくだされれば、市民活動をする方にとってメリットがあると思います。オンラインの使い方の前にパソコンがない人もいると思うので、パソコンが時間で使えるものがあったり、市民活動をする時のロッカーがあったり、自宅にオンライン環境がない人向けのブースがあったり、撮影ができる環境があったり、そこに行くメリットがある環境が整っていれば、使いたい人や教わりたい人は行くと思います。もしかしたら専門家を育成しなくても人材が自ずと集まるかもしれません。そういう環境ができれば、行政が用意するものとは別にいろいろなコワーキングスペースが生まれるかもしれません。できる人は地元のそういう場所があつたら気軽に利用できるようにして、会費をとってもいいと思います。市民活動を開始する初年度は会費をとらないようにすれば、新しい人が活用しやすくなるかもしれません。私の活動に関していうと、子連れで行ってちょっと買い物をしている間、見てくれるボランティアも、子ども子育て支援課のボランティア養成講座で養成しています。ボランティアがそこで活動できたら活動の場所はクリアできて、お互いのメリットにつながるかもしれません。まずは全体的な場所の環境を整えてインフラ整備をしていくのと併せて段階的にそろえば、もしかしていい人が集まるかもしれません。その中からまたどんどんレベルアップしていくかもしれません。

規制の問題もありますが、リスクマネジメントは法律的な問題など専門家の領域だと思うので、そこは切り分けて考えていけば段階ごとにできることが増えていくし、個別の講座を開くよりも環境を整備するというのを行政がやるべきだと個人的に思います。

【委員長】非常にわかりやすかったです。コロナのもとで大きく変化しているのがこの領域だと思います。コロナが収束して誰もがマスクなしで対面できるようになったとしても、確実に残るのは今議論しているオンラインの利用ということだと思います。オンラインの利用を抜きにして活動支援は考えられないと思った方がいいかもしれません。ここで委員の皆様と共通理解をつくりたいと思います。F委員がおっしゃった整理は重要で、これを意識しながら議論してもいいと思っています。7つの論点が出ていますが、①～④の論点と⑤～⑦の論点は質が違います。F委員がおっしゃったように「1 インフラの整備」「2 情報サービス」「3 コンテンツの運用」の3つの階層でわけて議論すべきだと思います。そういう意味では①～④は1、2にあたる部分です。なかなか分けにくいのは、水道がひかれたが水の飲み方がわからないみたいなところがあるのでセットで考えるしかありません。それは先に議論して、その上でコンテンツの運用、発信は少しややこしい。意見があつたように、今までは市が市民に発信することを想定していたが、市民がそのツールを使って独自に発信するというのをどのように考えていくのか、これは議論が必要になります。7つの論点のうち①～④をひとくくりにして、インフラの整備と情報サービスですが、こういう問題として議論してある程度共通理解をつけた上で、コンテンツや発信の仕方の問題について議論したらどうかと思います。その上で、Wi-Fi環境は公共施設にあって当たり前どころか武蔵野市のどこに行っても、プライベートスペース以外はどこでもあって当たり前前の社会を想定した方がいいのかもしれませんが。広場でも公園でもどこでも、建物の中というイメージを一度捨てて、武蔵野市のどこにいても無料でオンラインにアクセスできることを想定する。それを前提にしないと話が進みません。予算の問題は順次、市で検討してもらうこと

にして、いろいろなトラブルが予想されますが、それは別途考えることにして、これから先はオンライン環境のない公共スペースはあるべきではないと考えたい。皆様はどのように思われますか。私はWi-Fi環境はどこでもあるものだという前提で考えていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(一同賛同)

【委員長】そのうえでご指摘いただいたように情報格差の問題があります。使えない人にどういうふうにメリットがあるようにするのか。この点については利用者から学ばばいいという話もありました。また、Wi-Fi環境があればそこに人が集まってくる、人が集まってくれば、わからなければ聞く方法はあると思います。それはWi-Fiだけではなく、より専門的なノウハウも含めてやれる可能性があるのではないかという話ですが、どこにどういう形で格差の是正や情報サービスの共有を図っていけばいいのか。もう少し皆様の意見をお聞きしたいと思います。2点目の論点になりますが知恵をお貸してください。

【副委員長】Wi-Fi環境が整うというのは前提だと思っています。それによって人が集まるというのも想定できます。その一方で、人が集まる質で考えたときに、いろいろなコワーキングスペースやオンラインツールを取り入れることによって人が集まるということが起きていますが、コミセンという場所が同じようなことで人が集まったとして、それをよしとするのかというところは個人的には気になっています。私の場合は障害のある方々と普段接しています。ご自宅にWi-Fi環境がない方や生活が困窮していてその費用が払えない方、障害があって手続きや設定にサポートが必要な方など、様々な生活のしづらさを抱えている方々がいらっしゃいます。そういう方々がコミセンに行くことによって、就職活動の準備ができるようになるとか、仕事に就いたときに自宅ではオンラインで仕事ができないが、コミセンを使うことによって働ける環境が広がるなど、すべての人が利用することができるというのが、コミュニティセンターとして1つの役割ではないかと思っています。社会的弱者と言われる方々やマイノリティの方々が、居場所を失わないような集まり方をどうやって工夫したらよいか、その視点はなくならない方がいいと思います。

【委員長】大変重要な指摘だと思います。私が整理し直すまでもなく明確な論点だと思います。コミセンは何のためにあるのかということ意識した人の集め方を工夫してやるべきだと思います。意識することによって新しい展開もありうるという話だったと思います。

【E委員】コミセンにもそういう能力のあるところ、ないところがあります。自主運営ですので、コミセンの温度差も出てきますから、その辺を踏まえて考えていかなければいけません。やりやすいところでモデルをやってみて、そこで内容や問題を精査すればいいと思います。ある程度できたら広めていくのはどうでしょうか。大型コミセンは自由に出入りできたり、リモートでやりたいという人がきたり、いろいろな人が関わります。その関わり方をどこかで試してみたいのではないかと思います。

【委員長】大事な論点がでてきているように思います。

【D委員】今の意見のように典型を作っていくしかないと思います。論点⑤で出てくる活動団体のリストの共有やサテライトといったもののいくつかのモデルとしてのコミセンを、東、中、西に意図的に作りながらやっていくことが必要だと思います。コミセンにサテライトスタジオがあったり、情報データバンクの端末があったり、極端なことをいえば就労支援の窓口につながる人がいたり、プレイスの相談コーナーとつながるなど、そうした取組みによって、コミセンの利用者も自分の世界を広げていけると思います。もう一方ではコミュニティの生まれて行くきっかけにしないと、単なるコワーキングスペースと変わらなくなりますので、税金を使ってやるのかという話になります。そういった声は地域に密着していれば密着しているほど多いと思います。そこを切り分けて表に出していくことが大事だと思います。

【F委員】お話をうかがっていて思ったのは、オンラインツールの普及・定着自体は、オンラインツールをうまく使いながらやるべきだと思います。オンラインツールのメリットは時間や空間

にしばられないことです。コミセンでいろいろな相談会をやるときも物理的な場所としては1つのコミセンでやると思いますが、それをオンラインで他のコミセンでも同時に参加できるようにすれば、参加者の層が広がってくると思います。時間帯も今よりもっと自由度が高まります。講座を録画しておいてネット上で見られるようにしておけば、リアルタイムでは参加できなかった人を見ることができます。色々な講座をデータベース化して蓄積し、いつでも使えるような環境を作っていくことで選択肢を広げ、自由度を上げていきます。これまでは参加できなかった人が参加できるようになっていく。これまでは一回きりしか提供できなかった知識やノウハウを繰り返し提供できるようにしていくという形で、オンラインを定着させるためにオンラインツールを使っていくということが重要だと思います。

【委員長】これからWi-Fi環境がどこでも整備されるということは大前提だという話をしましたが、あとは時間の問題なのでそれを使ってどういうふうにもいろいろな事業を進めていくかという話でいいと思います。F委員がおっしゃったように、それをYouTubeにアップして録画したのを見ていただくことは、別の3番目にあたるコンテンツの管理運用の問題が出てきますので工夫が必要かもしれません。少なくともそういうことができる環境になりつつあるということ意識して、うまくやっていくのはどうでしょうか。コミセンだけではないですが、公共施設の役割を転換した方がいいのかもしれませんが、つまり、屋根のある公園みたいなもので、どんな人が来ても、そこで何をしても人に迷惑をかけなければいい、それぐらいのゆるい感じでいいと思います。そこでトラブルがあったらその都度解決していくという格好ですみ分けするというのもいいのではないかと。オープンにすることによって課題を抱えた人も来やすくなるのではないかと。逆にいえば、高齢者を集めようとして施設をつくと若い人は絶対に来ない。ところが若い人に向けて施設をつくと高齢者も来るという話を他市で議論したことがあります。対象を絞り込みすぎるとみんなが来なくなる。むしろオープンな対象にすると意外といろいろな人が来て、そこで色々な可能性が生まれてくる経験をしました。コミセンの利用者を固定的に考えるのではなく、公共施設なので地域にいるいろいろな人が来て何をやってもいい。そういう発想で考えられないだろうかということです。そうすると、そこに課題を抱えた人がきた時にいったいどういう対応をするのか、何かトラブルがあったらどうすればいいのか。それは次の段階で考えればいいと思います。仕切りを作らずにできるだけオープンにしてコミセンやプレイスを活用するということから考えていった方がいい気がします。公共施設だからといって、その場を使ってテレワークしても悪いと言い切らないのも1つの方法だと思います。居心地がいいならいてください。ただし他の人の迷惑にならないように。そういう転換があってもいい気がします。Wi-Fiが整備されたら学校に行きたくない子どもも来てもらってもいい。いろいろな人が自由に来て自分の居場所を見つけて、そこにいてもらえればいい。そういう人たちにどう支援するのかというのは次の課題として取り組めばいいのではないかと思います。

【D委員】委員長が言われた部分を確認しますが、資料2の「30コミセンのデジタル化・Wi-Fi整備とそれに向けた運営者の学びなど活動体制の整備」と表現されていますが、運営者の学びというところを、オンライン化・Wi-Fi化されたことによってコミセンの活動内容が変わっていくという部分を含めた運営者の学びというふうにししないと、単に技術的なWi-Fiの活用方法や利用方法、撮影の仕方になってしまうので、扉が開かれるといろいろなことが入ってくることを前提にもう一度学び直しをする。コミュニティ協議会には、それぞれ地元の人たちのためにやってきたという自負がある人たちがたくさんいます。門戸を開いて誰でも来ていい、何をやってもいいというのは、しっかりと説明をして学んでいかないといけません。その学びができればより強固なものになると思うし、その辺を含めて進めていかなければいけない気がします。

【委員長】今の意見には非常に共感するところがあります。オンライン技術の話ではなく、オンラインを使って集まってくる人たちに対する支援や関わり方の問題です。もう一度運営側も学び直しをしなければいけません。来る人にどう対応するかというよりは、来る人をどう活用して地域の中で課題解決につなげていくかという新しい次元の考え方やノウハウが必要だとD委員はお

っしやったと私は受け取りました。それはコミセンだけではなく、プレイスもそういうことがあるのではないのでしょうか。プレイスは非常に有効な活動をしてきましたが、オンラインを活用した論点でいうと⑥になりますが、Wi-Fi環境に対応できるかという点はまだ少し難しいと思います。すべてのコミセンを同じレベルでやることは難しいので、いくつかのモデルとなるコミセンに人材育成やノウハウ、もしかするとWi-Fi環境とは別に空間の再整備も必要かもしれませんが、そういうモデルをつくって、コロナ後のコミセンや公共施設のあり方として示していける可能性がある。もう少しこの話をして次に進みたいと思います。

【F委員】そういったモデルコミセンをつくるのであれば、そこにはオンライン会議ができるような設備を整備するという点を考えてみてはいかがでしょうか。簡単なことでプロジェクター、スクリーン、パソコン、webカメラ、スピーカーマイクがあればいいと思います。オンライン会議ができる環境をつくっておいて、研連の会議を1か所に集まらずにオンラインでやってみるとか、あるいは、それぞれのコミセンに対面の人もあるし、オンラインで参加する人もいるような、複数のコミセンで共通して何かをやってみるなど、オンライン環境を実際にコミセンの協議会の方たちが使ってみることで、いろいろな理解も深まってくると思うし、色々なアイデアも出てくると思います。オンライン環境の整備といった時に、その一環としてオンライン会議ができる環境というものを将来的にはすべてのコミセンで整えていったらいいと思います。すべての人に公開しなくても、まずは協議会の方たちが使うだけでもいいと思うので、そういう環境を整えていくということも考えてはどうかと思います。図書館はWi-Fiは整っていますか。それこそニューヨーク公共図書館ではないですが、図書館はいろいろな人が集まってきて、いろいろなことをやるので図書館もインフラ整備をした方がいいと思います。

【事務局】図書館のWi-Fiについては、中央図書館、プレイス、吉祥寺も含めて3つの図書館すべてにWi-Fi環境は整っています。研連の会議については、今年度の3回目ぐらいから対面とオンラインのハイブリットな形で開いています。

【委員長】具体的な提案でした。慣れてしまえばコストはかからないと思います。スクリーンとプロジェクターとスピーカーマイク、パソコンが1台あれば、世界中どこでもつながるのが特徴です。利用の仕方については一定程度議論する必要があるにしても、そういうものを前提にしたコミセンをつくっていく。

だいぶ意見をいただきましたが1つは大前提として公共施設に限らず公共空間のWi-Fi環境は自治体の責任で整備するべきで、これは速やかに整備したほうがいい。その上でツール利用の問題として色々な可能性があります。具体的なあり方として仮に「オンライン会議室」と呼んでもいいと思いますが、オンラインを活用して全国、全世界とつながっていけるようなスペースを意識的につくって活用する。活用の仕方が分からなければそういうことが得意な人に教えてもらうというやり方があります。これがまさにツールの利用の話で、スタッフも新しい状況に慣れていく必要があります。オンラインを使って個人や活動団体を支援するという点を理解する。さらにもう1つ、いろいろな人が色々な理由で来ていいと先ほど言ったように、学校に行きたくない子供がきても誰も怒らない。そうすると多様性を確保することになります。そういう場に転換する方向で考える。当然スタッフもいろいろな人が来て、いろいろな利用の仕方をするのに対して、どういうふうに関わっていけばいいのか、という問題も出てきます。そういう点でも、運営側として研修や情報交換をしてレベルアップしていく。そういうふうイメージすることができると思います。どう具体化するかというのは、計画の中でまた議論できると思います。コンテンツの運用の問題は難しいので議論を棚上げにしていますが、F委員がおっしゃったインフラとツール利用に関しては、ここである程度合意できるという方向で計画に書いていくことにしたいと思います。今の2点について皆様から合意いただいたということで、次のテーマに入りたいと思います。

【E委員】寄せ鍋と同じで入れ物を1つ考えて、中に入る具は各々に任せる。どういう味付けにするか、どういう仕立てにするかは考えてもらう「寄せ鍋スタイル」だと考えます。水炊きだと

入れるものは決まっています。寄せ鍋にしてもいい、その中の味付けは各々に任せて、どういう寄せ鍋をつくるかというところを考えてもらったら面白いと思います。

【委員長】先ほどの水道の例えと今の寄せ鍋の例え「寄せ鍋理論」は、計画に盛り込めるかどうかかわかりませんが、キーワードとしてこれから使っていきたいと思います。それでは論点②について説明をお願いします。

【事務局】（資料2 論点②について説明）

【委員長】2つのポイントで議論するのがいいと思います。1つは、オンライン環境を前提に新しいイメージで集ってもらい、活動してもらおうという話を踏まえて、この問題を考えた方がいいと思います。通常のやり方が悪いわけではなく、今問われているのはオンラインをいろいろな意味で活用する。それを前提とした、きっかけづくりです。人が集まって来て、それをきっかけにどのようにひとりひとりの市民が活動を生み出していくのか。そのきっかけづくりのポイントとして、ここには7つのポイントが出されています。きっかけづくりを支援する方法として、この中には大学生に関わってもらったり、あるいは住んでなくても、働いている人がここで仕事の行き帰りにいろいろやってもらったりしてもいい。地縁のある人でやってもらってもいいのではないかと。地縁がなくても面白いと思って来てくれる人は使ったらいいのではないかと。支援の仕方が一部入っています。いろいろな言い方がありますが、ひとりひとりの趣味の活動のきっかけをどうやってつくって、そして育てていけばいいのかという話です。そういう意味で皆様のアイデアをお聞きしたいと思います。

【B委員】具体的なきっかけづくりは難しいですが、定期的を開催することが大事だと思っています。新しいことをはじめると浸透するまでに1年ぐらいかかります。単発でイベントを開催しても認識されるまでに時間がかかります。参加するしないにかかわらず、毎月1回でもいいので定期的に開催して、まずはやってみて定着させていくことが必要だと思います。その中で参加する方々の意見を聞いていきます。この時間帯だから参加しづらいなど、いろいろなことが出てくると。その辺はリアルとの併用が必要で、情報が溢れているので取捨選択していくことになりませんが、その選択をするときにはロコミが大きいです。気楽に参加できるかどうか、任意性が高いかどうかは大事な部分だと思います。1回参加したらずっと参加し続けなければいけないのではないかと、個人情報とられるのではないかなど、いろいろなリスクを恐れている方がいらっしゃると思います。気軽な分だけ逆に怖いと思う人は多くいると思うので、その辺のバランスだと思います。いろいろ言っても顔を合わせてあいさつするようになったら、信用するようになったりする。「あの人がいるなら参加する」ということは誰にでもあると思います。その辺はコミセンが担える部分かもしれません。各々のつながりや直接顔を合わせるという部分とうまいバランスで、いろいろな入り口があって入りやすい環境がある。その中で今回は参加できなかったが、次は参加してみようという人も参加できるように、スケジューリングが大切になると思います。定期的に行えば、今回は合わなかったけれど、次だったら合わせられる人が出てくるかもしれません。「待つ」と「開く」みたいな形ができてくると、きっかけの1つになるかもしれないと思いました。

【委員長】事務局から「きっかけづくり」という点でいうと、論点③もきっかけづくりにつながるので、一緒に議論していただけないかという話がありました。B委員がおっしゃったことは継続で議論したいと思いますが、論点③の説明をお願いします。

【事務局】（資料2 論点③について説明）

【委員長】論点②は仕掛やとか支援に重点があり、論点③も裏表の関係で仕掛け方の話になります。大事な指摘だと思ったのは、集まる一歩目が大事で、論点①との関係でいうと、Wi-Fi環境があって誰がきて何をしてもいいという敷居の低さを利用して、そこで自分がひとりでSNSを見ているだけでなく、周りの人やその場の特性に注目をして、それを生かすための一歩目をどうすればいいのかという話で考えていくといいと思います。こんなことをやっているなら行ってみよう、まずは誘い込んで、その次に声かけをする。ただし、住所や電話番号、アドレスを教

えてしまっただけでめとられるのも苦痛なので、もう少し気楽に、つかず離れず出入りできるようにつながり方ができないだろうかという話がこの3番目のところに出てくる気がします。欲を言えば、さらに学びを活動や実践につなげる。要するに、自分の課題解決や環境をつくり変えていく、アクションにつなげていくということと考えていけばいいと思います。そういうものにしていくために、いろいろな人の支援が必要ですが、その支援者として大学生を活用してもいいし、通勤やいろいろな仕事をしている人を活用してもいいし、いろいろな人が使えます。これが論点②のような気がします。論点②と③はやはりつながっていますので、もう少し皆様の意見を聞きながら深めたいと思います。

【E委員】どこにでも「お節介なおばさん」や「おしゃべりなおじさん」がいます。入ってくると、「今日は何をしに来たの」「何か困っていることはないの」など、そういう切り口は大事です。それと同時に「おはようございます」「いらっしゃい」など、そういう切り口から壁をとるといって、一歩進められる人たちが必要です。そういう切り口からひとつ壁をとる、一歩踏み入れる人はもっと必要だと思います。キーマンとはいいいませんが、そこからきっかけづくりをしていく人は、無理矢理に情報を取るわけではなく、しゃべっていると自然に情報が出てきます。私は、いろいろなボランティアセンターに行ったことがあります。ボランティアセンターでもそういう人がいて、少ししゃべると「手伝ってもいい」という話になります。そんな人がいると盛り上がり方が違うし、つなぎ方も上手になる。そういう接着的な要素の人がいると非常にいいと思います。

【委員長】私が昔、いろいろと議論、勉強した「公民館3階建て論」のロビーワークの話のような気がしました。声かけする人がいていいということです。声のかけ方は、臨機応変で柔軟にやらないと下手をすると「あなた何をしに来たの」という話になってしまいます。自然に声かけしてうまくつないでいくようなやり方をもう一度見直す。公共施設のあり方としてひとつ大事なことです。公共施設は、ある時期から用いない人は来てはいけないものになりました。市役所をテレワークで使ったら怒られます。市役所は目的がある人が来るところで、もしかすると、コミセンやプレイスも目的のある人が来るようになっていないだろうか。先ほどの議論でいうとWi-Fiをひとつのきっかけにして、誰が来て何をしてもいいという環境で、そこに来ている人にどういうふうに声かけをして、うまく次の一歩を踏み出してもらおうかという話になります。私はスマホの使いかたが分からない時は学生に聞きます。これはどうすればいいのかと聞くと、簡単に教えてくれます。スマホを一生懸命いじっている人に聞けばいいということです。そういういろいろな声かけや関わり方の作り方があるわけです。そういう視点から考えてみる必要もあるのではないかと思います。どちらかというと、今までは人がたくさん集まる講座やイベントを企画して、その質によって問題意識を持った人を集めようとしていましたが、これからはいろいろな目的で集まっている人に、自然に声かけをして、いろいろな人をつないでいくというノウハウとやり方は大事かもしれません。ここでも支援の仕方の転換が必要かもしれないと思って聞いておりました。

【A委員】論点②の6ですが、コミセンにもよりますが、近くの企業の人たちが会議をしているということが以前に課題としてありました。その議論の中でも、Wi-Fiと同じように、そこに集まってくる人たちにどう参加してもらおうかという課題のひとつとして出ていたということもあります。1人でWi-Fiを使いに来ている人も含めて、きっかけとして気づいてもらう。コミセンで活動している人たちがその人に気づいてもらうようなものがあると非常につながりやすくなってくると思います。来るもの拒まずで、今後はやっていってもいいのではないかと思います。

【委員長】公共空間である会議室の設計の仕方を変更する手もあるかもしれません。私が別のまちでやっていたとき、流行りのガラス張りですぐ外から見えるようにしようとなった時に、事務局から、実はそういうものを作ったら、みんなブラインドを下ろして見えないようにしてしまうという話でした。大事なことは、企業の会議をやってもいいが、「あけっぴろげで、音も漏れるし、書いてあるものもみんな見える状態でやりたかったらどうぞ」と、そういうふうな場に変換して

いくと、特別な使われ方をしない可能性があります。いつもみんなに見てもらい、聞いてもらう、そういうイメージで、もう一度公共空間を考え直す。実はオンラインというのはそういう意味があります。意外とオープンにすることによって、いろいろなものがつながったり、いろいろなルールができたりする可能性があると思います。

【副委員長】ここは他のところも含めた議題だと思っています。市民活動を考えたら、必ず誰かが参加しないとイケないものでもないし、自由だと思います。ただ一方で、参加を継続していくためにはどうしたらいいのか。参加を促せるようなきっかけは何かを考えなければいけないということも、オンラインが話題になる前から課題としてあります。それも含めて、どうしたらいいのか考えたらいいと思いました。参加の一步目という支援で、周りの人が声を掛けてくれることによって参加がしやすくなるということがある一方で、そういう顔が広い方や声掛けができる方がいる時の会は活性化していたが、その人がいない時はうまく回らなくなることが起きています。全部でなくてもいいと思いますが、声かけが活動を存続するために大事なものだということを認識するような機会もあっていいと思います。

数年前に東京都であった研修ですが、住民のキーパーソンの存在を育成する研修がありました。住民の潤滑油になるような方を養成しよう。声のかけ方や話の聴き方のノウハウやハウツーもありつつ、地域の活動というのはこういうものだ。社会課題はこういうものがあるということ学習して、自身の活動に戻ってくると、見える景色が変わってくるという研修がありました。仕掛けづくりやきっかけづくりを考えた時に、そういうことを考える人が地域の中に意図的に存在するという事は大事だと思います。そういう人がいる状態をつくるためにどこかから呼んでくるか、あるいは、そういう人たちを養成する講座を開催することを考えてはどうかと思いました。先ほどもオンラインの話があって、参加するきっかけ自体が増えていくのが魅力的な活動のひとつになっていて、地域活動は比較的女性の参加率が高く、男性にどうやって参加してもらおうと以前から話題としてある中で、オンラインができると、会社の方が職場から参加できるとか、オンラインの知識は会社で習っているので自分のノウハウを提供できるとか、新しい参加の階段が踏まれるのではないかと思います。もう一方で、その階段を登った人が次の階段がなくて、そのまま離脱していくこともあると思いますので、そのあたりを取り組むのであれば、一定程度の養成や研修という仕組みもあっていいと思います。助けを求めた時に、そこの参加に応じられるような活動や住民だったりすると、論点②、③に役立つようなことが起きるのではないかと思います。

【委員長】キーパーソンになりそうな人の養成・研修や継続性ですが、いろいろな人たちがいつもつながっている状態であれば出番がありますが、うまくネットワークがつくられていないと、ここはもう飽きたからいいみたいな話になる可能性があります。それをどうやってうまくつなげていくのか。ネットワークというのは簡単ですが、ネットワークをきちんとつくっていく仕事もスタッフの仕事です。いろいろな人材を知っているという事もありますし、そこに来た人のいろいろなものをつないでいく。声かけもそういうことですが、そういうものが意識されないといけません。かっちりした研修システムをつくってもダメで、臨機応変にその都度いろいろな人を結び付けていく格好になると思いました。とても大事な話だと思います。

【事務局】議論は3番までで、論点⑤のコーディネート機能に今の話がつながるとしますので、論点⑤の頭だしまで説明をさせていただきます。(資料2 論点⑤について説明)

【委員長】論点④も説明をお願いします。

【事務局】(資料2 論点④について説明)

【委員長】プレイスは別格だと思いますので論点⑥は残しておきます。基本的には、先ほど議論いただいたように、論点⑤は寄せ鍋の鍋奉行の話をしています。その鍋奉行の機能をどう考えるのかという議論でいいと思います。その延長上に連携があります。連携は個人というよりは組織と組織の連携・協働の話になります。これが論点④だと思います。ここまでの話で意見をいただければと思います。

【F委員】論点②と③に戻ってしまいますが、E委員が新しく人を巻き込んでいくためにはお節介が必要だとおっしゃっていました。その通りですが、一方でいきなり距離を詰められると引いてしまう人がかなりの割合にいることも確かです。全体的にいきなり強く束縛されるのに抵抗がある人が増えてきていると思います。そういう意味では、いきなり距離を詰めるのではなく、こちらはこんなことをやっているのと一緒にやってみませんか、自分の志向と合う活動を探している人たちにきちんと情報が伝わるような仕組みが必要だと思います。ひとつは、ネット上に情報が溢れているとの意見がありましたが、地域の活動についての情報は積極的に探していかなないとなかなか手に入りません。これを見ればある程度の全貌がわかる、活動がわかるというようなサイトやデータベースを整備していく。部分的にはプレイスでもあるようですが、それを使い勝手のいいものにしていくということは重要だと思います。

もうひとつは、ある活動に関心を持ったとして、いきなりフルコミットメントするのではなく、お試しで参加できるような枠組みがあるといいと思います。そういう意味では、「お父さんお帰りのさいパーティー」はそういう性格を持っている事例です。地域にあまり関わりがなかった男性、これからは女性もそうになっていくと思いますが、そういう人たちに「地域でこんな活動をやっているから参加してみませんか」という形で、見本市を一覧できるようにしています。お父さんお帰りのさいパーティーのような見本市を、リアルでもいいし、オンラインでもできると思います。オンラインの方がさらにハードルが下がります。そういう見本市のようなものを何かしら枠組みとして準備することができないかと思いました。どうやって巻き込んでいくか、どう最初の一步を踏み出してもらうかについてはお父さんお帰りのさいパーティーが、かなりノウハウを蓄積しています。問題点や課題も含めて蓄積しているはずで。

【E委員】お父さんお帰りのさいパーティーを始めたきっかけは奥様相談会です。奥様から「定年後、亭主に一日中いられたら私は何もできなくなってしまう」というところから、それでは定年退職したお父さんを集めて、いろいろな活動に巻き込んでいこうということになりました。そういう人たちは、企業でいろいろなノウハウをお持ちの方が多く、ノウハウをお借りすることもあるし、いろいろな場をつくるということを中心に、最終的には奥様の救済措置として始めたことです。本人たちが一生懸命いろいろな形で関わるようになって、今のお父さんお帰りのさいパーティーが開かれるようになりました。

【委員長】身近にモデルがあるということがわかりました。

【F委員】きっかけづくりで「お父さんお帰りのさいパーティー」をやっても、そこにずっと入ってくる人もいれば、入って来られない人もいるはずで。入ってきてもらうためには、どうしたらいいのかという点を教えてください

【E委員】それはハードルを下げるということです。「あれしろ、これしろ」とこちらから強要はしていません。場の提供で、いろいろな団体を紹介していくというスタイルに向いていきました。

【委員長】ぜひ計画の中にうまく位置づけてください。試行錯誤があつて、その試行錯誤のプロセスそのものを共有すると、いろいろな宝物になっている可能性があるのも、もう少し話をお聞きしたいと思いました。コロナで人と人とが直に会う機会が減っている。会ったとしても、この机もそうですが2メートルぐらいは離れています。これが何年も続くと、いきなり半径1m以内に人が踏み込んでくると、ドキッとするという文化というか感性が強まると思います。そういう意味では、いきなり声をかけられると動揺する人は当然いると思います。そういうことを意識した働きかけや関わり方を模索する必要があります。「あなた何をしに来たの」と言うのと同じで、「何かやりたいことないの」といきなり聞かれても困ると思います。いろいろなものを見ていく中で、面白そうだから仲間に入れて欲しいという感じのがたくさんあつて、やってみただけやっぱ無理なら、また別なところでやればいいわけで、そういうお試し期間というか試行錯誤をやるような空間として、コミセンやプレイスを活用できないかということだと思います。

次回は、たたき台の文章になったものを前に、支援の問題やコーディネート、連携の問題につい

て、今の話を元に議論を深めたいと思います。今回の論点ごとの議論はあくまでも呼び水でしかありません。今日は不十分だったと思いますが、いろいろな点でまた意見をいただいて、計画の文案の中に入れ込んでいきたいと思います。論点⑥は残っていますが、これはプレイスの話なのでかなり具体的に話せるとと思います。次回から文案を元に議論していただきます。その時に必要があれば、この論点に戻ってこういう立て方や見方は変えた方がいいのではないかなど、もっと踏み込んでこうした方がいいのではないかという議論をしていただいてもいいと思います。次回は具体的に計画の文案を前にしながら議論したいと思いますので、よろしく願いいたします。それでは事務局にお返しします。

(3) その他

3 事務連絡

【事務局】次回10/27は事前に文章案をお送りして議論していただきたいと考えています。今回初めて1人1台の端末を使った形としましたが、次回は緊急事態宣言が解除されていますが同様にオンラインで開きたいと思います。

【委員長】先ほど申し上げたように、緊急事態宣言が解除されてだいぶ感染者も減っています。10月はどうかわかりませんが、必ず増えると言われていいますので、次回以降も現在のやり方をしばらく続けるという形がいいと思います。

【事務局】11月につきましては11/12を予定しています。

【E委員】前回の委員会での「社協のふれあいについて」の発言を一部訂正申し上げます。発行部数を全戸配布と言いましたが、全戸配布ではなく新聞折込で45,000戸に配布しています。680万円は最大限の予算で、実際は640～650万円ぐらいです。現在は予算の関係で隔月になっていますので300万円ぐらいです。NPOやボランティア団体の紹介など出していますので、ご覧いただければと思います。ぜひ皆さまからご要望があれば対処いたします。作り方についても皆様に検討いただければありがたいと思います。

4 閉会

【委員長】長い時間にわたりまして議論に参加いただきありがとうございます。次回もこういう形で会議をやることになると思いますのでよろしくお願いします。お疲れ様でした。

以上